

朝のこない夜はない

真実の説法は、 石をもうなずかせます

副山首 鈴木正修



法音寺が発行している書籍で『しあわせへの道』というものがあります。著者は御開山上人の叔父さまの鈴木慈学上人です。読んでいただくと分かると思いますが、慈学上人の道念堅固な信仰が随所に顕れています。今回は、以前岐阜支院前主管の丹羽智学上人からお聞きした、慈学上人らしいエピソードを紹介します。

現在、岐阜支院では月に一回、夜の講日が行なわれていますが、慈学上



人の時代には夜の講日はありませんでした。ある時、一人の信者さんが「夜しかお寺に来られない人もあるから、夜もたまには講日をして欲しい」と丹羽上人に言われました。その事を丹羽上人が慈学上人に相談されると、慈学上人は快く講師を引き受けられました。しかし、支院によっては、昼は大勢の人が集まっても夜はなかなか難しいところもあります。当時の岐阜支院もそうだったようです。一回目こそまずまずだったようですが、回を重ねるごとに一人減り二人減りして、遂には参詣者が一人という日があったそうです。

丹羽上人は慈学上人にどうされるか聞かれました。その時、慈学上人は「一人でも当然、法話をさせてもらう。いや誰もいなくてもやる」と言われたそうです。丹羽上人は思わず「誰もいない時は何に向かって話をされるんですか」と聞かれたそうです。それに対して慈学上人は「柱に向かって話せばいい」と言われたそうです。

法華経法師品に次の一節があります。

「若し説法者、空閑の処に在らば、我時に広く天・龍・鬼神・乾闥婆・阿



修羅等を遣わして、其の説法を聴かしめん」

（もし法を説く人が、誰も人の居ないような所に居るならば、仏は天・龍・鬼神等を遣わしてその説法を聴かせる）

慈学上人はこの一節を深く信じておられたのだと思います。

昔、中国の南北朝の時代に活躍した道生という僧がいます。この人は法師品の教えを体現した人です。道生は鳩摩羅什三歳の弟子で門下四傑の一人に数えられた人です。

羅什は法華経を訳したことで有名ですが、道生は師である羅什の思想を受け継ぎ、『法華経義疏』を著し、後の天台智顛へとつながっていく法華経解釈を創始しました。

また五時八教のルートとなる独自の教相判釈を打ち立て、さらに闡提（仏法を否定し誹謗し悔悟しない人）も成仏をすると説きました。この事が当時の仏教界で論争となりました。当時の仏教界では、闡提は成仏しにくいという考え方が主流でした（当時は涅槃経の前半部分しか伝わっておらず、ここに闡提は成仏しにくいことが繰り返し説かれていたため、後



朝のこない夜はない (208)

後半部分が伝わり、道生の正しさが証明された。

法華經の悉皆成仏の教えを深く信受する道生は、やむなく蘇州の虎丘寺に隠棲しました。そこで道生は大自然を相手に、人っ子一人いない処で法華經を説きました。するとある日、大きな石が「その通り、その通り」と言うように、うなずくように動いたと言います。今はかつてお寺があった場所は虎丘公園となり、點頭石と呼ばれる石がそこにあるそうです（點頭とはうなずくこと）。

この話を信じる人よりも信じない人の方が多いでしよう。しかし私は、道生の真実の説法に諸天が呼応されたのだと信じたいです。おそらく慈学上人なら「当然起こるべくして起こったことだ」と言われるのではないでしようか。